

審査の結果の要旨

氏名 宮下 貴裕

本論文は、「民」の立場に位置づけられる様々な主体による道路の機能・価値に関する議論と建築空間までを対象として展開された都市空間を道というイメージで捉えることによる議論の変遷に注目し、人間のための空間としての道に関する議論の文脈とその歴史的意義を明らかにしたものである。その際、道という概念が道路のみならず、建築空間までを含んだ幅広い領域を対象としたイメージとして人々に認識されていたことを踏まえ、これらの領域において道として認識された空間を「みち空間」として考察の対象とした。1章では、以上のような研究の目的や基本概念が説明されている。

1部では都市・建築分野の専門家が展開した「みち空間」に関する議論や空間デザインの展開を明らかにされている。

2章では、建築専門雑誌において発表された「みち空間」に関する言説が、「道路空間に注目した議論の展開」「建築空間に注目した議論の展開」「道路と建築の関係性に注目した議論の展開」という3つのカテゴリーに分類され、各カテゴリーのコンテクストにおいてそれぞれの時代で関心の高まりが見られたテーマが「議論の系」として整理されている。抽出された15の系の中に多くの影響関係が見られた。得られた知見が実際の空間デザインの発想に結びついたケースとあくまで調査・研究レベルに留まったケースという二つの方向性が存在したが、これは分析の視点が手法論的アプローチによるものか、現象論的アプローチによるものかという違いが関係している。

3章では建築の設計を通して手法論的アプローチから「みち空間」を生み出そうと試みた芦原義信・黒川紀章・槇文彦という3名の建築家の言説を対象として、各建築家のそれぞれの時代における問題意識や構築された「みち」に関する空間概念の変遷などを明らかにした。各建築家が「みち」のイメージを建築設計として空間化するまでの理論構築のプロセスに注目すると、同時期における都市に対する問題意識や既存の「みち空間」に対する認識など、現象論的アプローチから得られた知見を手法化して空間デザインに反映させようとする姿

勢が存在した。

4章では現象論的アプローチから「みち空間」に関する様々な言説を発表し、多様な研究を通してわが国の「みち空間」が有する特性や価値を論じた専門家として上田篤に注目している。上田の「みち空間」に関する研究や言説は「ひろば」研究、「コミュニティ」研究、「道」研究という3つの流れとして捉えられた。長年に渡る研究において上田とその研究室の中で共有されていた認識は、当時のわが国が空間や情報の密度が極めて高い「高密度社会」であるということであり、日本の「みち空間」は様々な要素が密集し一つの空間における場の転換が日常的に求められる状況の中で存在する空間であると考察されてきた。このような基本認識に基づいた議論は、研究のテーマが変化する中でも、わが国の「みち空間」の特徴や固有性を明らかにする探究の軌跡であった。

2部では、東京・銀座通りにおいて、専門家のみならず実際に生活を展開する市民までを含む様々な主体が、「みち」に関する議論を通して都市空間の形成にどのように介入していたのかが明らかにされている。

5章では、銀座通り沿道に建築を生み出した建築家の当時の銀座通りに対する認識やそれぞれの建築の設計におけるデザインのアプローチに注目し、建築を設計するにあたって建築と道路空間の関係性をどのように構築しようと試みていたのかが明らかにされた。それぞれの設計者が銀座通りに形成されている既存空間の特性を認識した結果として、銀座通りの「みち空間」を構成する沿道建築に壁面のガラス張りやショーウィンドウ、建築敷地と歩道の境界に設定した壁面線といった共通点が生み出されたことが明らかにされた。

6章では、銀座通りの道路空間や沿道建築に対して高い関心を示してきた商店街組織・銀座通連合会に注目し、運動を展開していく中で組織内部で共有されてきた銀座通りの都市空間に対する現状認識や目指すべき「みち空間」のイメージの展開が、組織の内部資料から明らかされた。そして、銀座通りの「みち空間」に対する意識や空間イメージとして、道路空間と建築の壁面によって構成される領域の視覚的「美」という観点から、ショーウィンドウが連続的に配置される空間構成や連続する壁面線に見られる「見通しの良い道」というイメージが継承されていたことが明らかにされた。

結論にあたる7章では、各章で得られた知見がまとめられるとともに、「みち空間」イメージには「西歐的啓蒙主義型」、「日本の特殊性肯定型」、「地域文脈主義型」が存在することが指摘された。このような多様なイメージは、「みち」というわが国に歴史的に存在してきた概念に関する議論に注目することによって把握することができたものであり、現代の公共空間に関する議論においても、

このような「民」の立場によって現在に至る「人間のための空間」としての「みち空間」を求める思想のコンテクストが確かに形成されていたことを再認識し、再び「我々にとって『みち』とは何か」という問いを繰り返し求めていく必要があるとした。

以上のように、本論文は「みち空間」を巡る膨大な言説を系統的に整理するとともに、銀座通りを対象とした詳細な分析を踏まえて、今後の公共空間に関する議論に関して有益な示唆を導き出している。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。